

公立大学法人 京都市立芸術大学（学長：鷲田清一）は、2015 年 8 月 27 日（木）から 9 月 6 日（日）まで、京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA にて、京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品展「ART であしあと 6 図案科卒業・修了作品 衣によそおう」を開催します。

学生と教員の関係から生まれる学びの足跡を、作品を通して紹介する「アートであしあと」の第 6 回は、本学芸術資料館の収蔵品より、京都市立美術工芸学校図案科卒業作品の中から、明治後期より昭和戦前期までの間に制作された衣装及び装身具に関わる作品を選び展示します。

本学の前身にあたる京都府画学校に、意匠図案の専攻ができたのは明治 21 年のことです。最初は応用画学科と呼ばれていましたが、校名改称、組織変更を繰り返し、明治 32 年ようやく図案科という名称に落ち着きました。もともと京都府画学校は、染織や陶磁器などの地域産業の振興を期待して生まれたものでした。

しかし、当初の教育は画家を育てることに偏重してしまい、周囲の期待に応えるには時間がかかりました。まだ工芸は美術の一部というより産業の一部と捉えられていたのです。初期の図案教育が、日本画家である谷口香嶠（1864 - 1915）によって行われていたことを見ても、京都という地域が持つ保守的な美意識をうかがうことができます。日本絵画と意匠図案という教育の柱は、美術工芸学校への組織改編の中で明確に意識されるようになりました。

そして坂根雪佳（1866 - 1942）や古谷紅麟（1875-1910）ら図案を専門とする教員が教鞭を執るようになり、明治 42 年には学外と連携した美工会のような図案家の組織が校内に生まれ、この時期学校と社会は比較的円滑な協力体制を築くことに成功しています。当時、図案に関わる海外の情報も少なからず流入していましたが、この学校では、写生と琳派をはじめとする日本の古典から発想することが重視されました。

美術工芸学校の図案科は、長い歴史の中で伝統産業の分野に多くの人材を送り出しました。しかし、その教育は図案意匠の制作に特化しており、実制作に結びつく教育は、地域の工房にゆだねていました。京都に根付いた分業体制の中でこの図案教育は展開したのです。結果として図案家の活動は見えにくくなり、今日ではその足跡が辿れない人も少なくありません。

ここに展示する卒業作品は、京都における二大染織産業である友禅染と西陣織による制作のための図案です。日清戦争後の日本の軽工業の発展を受けて、京都でも染物や織物の需要に応える必要が生まれていました。美工会の研究会では、西村総左衛門（千総）や飯田新七（高島屋）ら染織産業界からの図案課題が提出され、相互の意見交換を経て購入されたといいます。京都染織産業界の華々しい発展と歩みを共にした衣装図案の世界を、皆様どうぞゆっくりと鑑賞ください。



丸岡比呂史《経錦女帯地図案》巻子 1913 年

湯浅源三《源氏物語の意婚礼衣装図案》軸 1918 年

■ 出展作家

奥村耕仙
小川南溪
丸岡比呂史
高井青陽
亀山素光
湯浅源三
湯浅源三

本庄陶苑
亀山重多郎
梅原栄二郎
岸田宗三郎
山田彦次郎
田中久義
水上邦彦

北村正太郎
北井庸三
宇佐美滝三郎
新開与作
高橋忠一
武下吉男



高橋忠一《三葉模様図案》屏風（2曲）1935年



田中久義《帯地図案》軸 1928年

■ 開催概要

展覧会名称：京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品展「ART であしあと6 図案科卒業・修了作品 衣によそおう」

主催：京都市立芸術大学

企画：京都市立芸術大学芸術資料館

会場：京都市立芸術大学ギャラリー@ KCUA

住所／京都市中京区押油小路町 238-1

会期：2015年8月27日（木）～9月6日（日）11:00～19:00（最終入場 18:30 まで）

休館日 月曜日

入場：無料

お問い合わせ：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA Tel: 075-253-1509 E-mail: gallery@kcua.ac.jp

公式サイト：<http://gallery.kcua.ac.jp>



■ プレス向け画像貸出について

本プレスリリースに掲載している画像はメディア掲載時にご利用いただけます。

ご希望の方は広報担当（西谷）までお問い合わせください。